

## 神に及ばぬ人間

### [聖書]ヨブ記33章1～18節

さてヨブよ、わたしの言葉を、わたしの言うことによく耳を傾けよ。見よ、わたしは口を開き、舌は口の中で動き始める。わたしの言葉はわたしの心を率直に表し、唇は知っていることをはっきりと語る。神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ。答えられるなら、答えてみよ。備えをして、わたしの前に立て。神の前では、わたしもあなたと同じように、土から取られたひとかけらのものにすぎない。見よ、わたしには脅かすような威力はない。あなたを押さえつけようとしているのではない。

あなたが話すのはわたしの耳に入り、声も言葉もわたしは聞いた。「わたしは潔白で、罪を犯していない。わたしは清く、とがめられる理由はない。それでも神はわたしに対する不満を見だし、たしを敵視される。わたしに足枷をはめ、行く道を見張っておられる。」ここにあなたの過ちがある、と言おう。神は人間よりも強いです。なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることを、いちいち説明されない。神は一つのことによって語られ、また、二つのことによって語られるが、人はそれに気がつかない。人が深い眠りに包まれ、横たわって眠ると、夢の中で、夜の幻の中で 神は人の耳を開き、懲らしめの言葉を封じ込められる。人が行いを改め、誇りを抑え こうして、その魂が滅亡を免れ、命が死の川を渡らずに済むようにされる。

### [序] ヨブ記の構造

ヨブ記は、昔から文学者や哲学者など、世界に広く多くの人々にも読まれてきた文書だと言われています。画家ブレイクはヨブを題材にした優れた絵を数々残しているそうです。見たいものです。日本では、夏目漱石がヨブ記を特に入念に読んでいた由です。

ヨブ記の構造は、序、1～2章と結び42章に挟まれて、ヨブと3人の友人との討論(3～31章)、エリフの演説(32～37章)、神の語りかけ(38～41章)、ヨブの悔い改めと神の祝福(42章)となっていますが、序と結びだけ読んで、肝心の中味を読まない人が多いと言われています。今回は久しぶりに中味を読む機会が与えられて、感謝です。皆さんも是非繰り返しお読みください。

### [1] ヨブの頑なな主張

ヨブは、東の国一番の富豪でしたが、「無垢な(汚れのない)正しい人、神を畏れ、悪を避けて生きている」(1:8)と神にも認められる人柄でした。ところが災難・不幸が次々と降りかかってきて、財産の全てと10人の子供たちを失い、更に彼自身が全身皮膚病にさいなまれる体になってしまいました。見舞いに来た友人たちは、悲惨なヨブの姿に7日7晩彼のそばにうずくまり、言葉をかけられませんでした。

しかし「死ぬことすら神は許されない」というヨブのうめきをきっかけに、友人たちとの議論が始まりました。不幸は神による裁きだと信じる友人たちは、罪を悔い改めるように勧めます。「あなたは甚だしく悪を行い、限りもなく不正をおこなったのではないか」「神に従い神と和解しなさい。そうすればあなたは幸せになるだろう」

しかしヨブには罪の自覚がないのです。何を懺悔してよいか分からないのです。「このわたしをこそ、神は救ってくださるべきではないか。神を無視する者なら、御前に出るはずはないではないか」「しかし神に

訴えるけれども、神は答えて下さらないのだ」とヨブは譲りません。

31章をお読みください。ヨブは、そのようなこと、即ち神から裁きを受けるような罪を犯したことは、「決してない」という言葉を14回も繰り返し語っています。そして「どうか、わたしの言うことを聞いてください」(31:35)と神に訴えています。こうして、友人たちとの議論は膠着状態になってしまいました。「ここで、この三人はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分は正しいと確信していたからである」(32:1)。議論は、結論を得ぬまま終わります。

## [2] エリフの指摘

すると、それまで遠慮していた年若いエリフが、突然、語り始めました。32章2節以下をご覧ください。

「さて、エリフは怒った。この人はブズ出身でラム族のバラクエルの子である。ヨブが神よりも自分の方が正しいと主張するので、彼は怒った。また、ヨブの三人の友人が、ヨブに罪のあることを示す適切な反論を見いだせなかったので、彼らに対しても怒った。」「彼らが皆、年長だったので、エリフはヨブに話しかけるのを控えていたが、この三人の口からヨブへの反論が何も出ないのを見たので怒ったのである。」

今日の33章に進みましょう。エリフが人生の先輩ヨブに対しても、はっきり物が言えたのは、4節「神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ」という自覚でした。そこで彼はこう語りかけます。8節「あなた(ヨブ)が(エリファズたちと)話すのは、わたしの耳に入り、声も言葉もわたしは聞いた。『わたしは潔白で、罪を犯していない。わたしは清く、とがめられる理由はない。それでも神はわたしに対する不満を見だし、わたしを敵視される。わたしに足枷をはめ、行く道を見張っておられる。』」

しかしエリフはこのヨブに対して、このように言い切りました。「ここにあなた(ヨブ)の過ちがあると言おう。神は人間よりも強くいます。なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることを、いちいち説明されない。神は一つのこと(ある方法)によって語られ、また、二つのこと(他の方法)によって語られるが、人はそれに気がつかない。」

「人が深い眠りに包まれ、横たわって眠ると、夢の中で、夜の幻の中で 神は人の耳を開き、懲らしめの言葉を封じ込められる。人が行いを改め(悪から離れ)、誇りを抑え(高慢を除き) こうして、その魂が滅亡を免れ、命が死の川(黄泉の川)を渡らずに済むようにされる。」(12～18節)

エリフは、「神は偉大な方で、我々人間が対等に議論できるお方ではない。神はご自分のなさることをいちいち説明なさらない。また色々な方法で我々に語られるから、我々人間は悟れないのだ。たとえば、夢の中でなされる神の啓示は明確な意味が隠されているから、夢を解く者の説明が必要だ。こうして示された神の言葉に従って、私たちは悪から離れ、高慢を除き、魂が滅亡をまぬがれ、命が死の川を渡らずに済むようになる」と語りました。

「ここにあなたの過ちがある」というエリフの率直な指摘は、実に適切ですね。エリフは32章6～10節で、こう語っています。「わたしは若く、あなたたちは年をとっておられる。だからわたしは遠慮し、わたしの意見をあえて言わなかった。日数がものを言い、年数が知恵を受けると思っていた。」

「しかし、人の中には**霊**があり、**悟りを与えるのは全能者の息吹**なのだ。目を重ねれば賢くなるというのではなく、老人になればふさわしい分別ができるのでもない。それゆえ、わたしの言うことも聞いてほしい。わたしの意見を述べてみたいと思う。」

そうです。私たちの体には、**神の息吹**である**聖霊**が注がれていて、この**聖霊**が、私たちに命を与え、知恵を与えて下さっているのです。この**信仰**をエリフは、はっきりと**自覚**していましたから、大先輩のヨブに対しても、**自分の若さに憶**することなく、語るべきことをしっかりと語る事が出来たのでした。

万物を創造し、支配しておられる**神**です。どうしてご自分のなさることを、この地上に存在する大勢の人間の一人であるヨブに、いちいち**説明**されるのでしょうか。それを要求する方がおかしい。それなのに、**自分の質問に答えてくれない**と言って、神と争おうとする。また神は、ある方法、また他の方法でと、**様々な方法**で語られるので、人がそれを悟れなくても当然です。

神は、**天地万物**を良い物として**創造**し、それを神に代わって**治める**ようにと、私たち**人間**をお創りになりました。そして私たちがその**使命**を果たすために、神は**ご自身の霊**を吹き込んで下さっているのです。ですからヨブも、神の**全知全能**と愛に信頼し、わが身に**聖霊**が**自由に働いて下さる信仰**を、深めていかなければならなかったのです。

### [3] ヨブの反応

この「**神の息吹**」という言葉は、ヨブも使っていました。しかし彼は、神の**霊**によって生かされているから、**自分の正しさを論証**するのだと主張しているのです。「**神の息吹**が、まだわたしの鼻にあり、わたしの息がまだ残っている限り、この唇は決して**不正**を語らず、この舌は決して**欺き**を言わない。断じて、あなたたち(友人)を正しいとはしない。死に至るまで、わたしは**潔白**を主張する」(27:3~5)

しかしそれは、**神ご自身**の偉大さ、全てのものに救いをもたらす働き**の素晴らしさ**を語らせる**霊の働き**とは違いますね。そこでエリフから「**あなたの過ちがある**」と指摘された罪、ヨブが悔い改めなければならない**罪**が、率直に示されたのでした。

しかし、どのような**災難**や不幸に見舞われても、神の前に**正しい者**として立つことが出来るようにと、ひたすら心がけて生きて来たヨブにとって、人生の苦勞をあまり経験していない**年若いエリフ**から「**ここにあなたの過ちがある**」などと言われて、どんな気持ちになったことでしょうか。人間はともすると、無意識のうちに**傲慢**になります。年をとり、老いていっただけでも、ここまで生きて来たのだという**誇り**を抱くものです。

ですからヨブは、エリフの率直な指摘を受けた時、「えっ！この**若造**が」と思ったに違いありません。親友3人相手に、自分の正しさを言い張ってきたのですから。でもエリフは**聖霊**に導かれていました。だからヨブはやがて、エリフの言葉を**神の導き**と受けとめて、**自分の傲慢さを悔い改める一歩**を、踏み出すことができたのではないのでしょうか。ここがヨブの**偉い所**ですね。だからこそヨブは、エリフの演説を聞き終えると直ぐに、彼に直接話しかけて下さる**神の御声**を聞くことが出来たのではないのでしょうか。この点を、私たちがヨブに学ばなければなりません。

## [結] 及びもつかない愛の神

罪の悔い改めを、かわるがわる説得する3人の親友たちに対して、ヨブは答えてきました。「断じてあなたたちを正しいとはしない。死に至るまで、わたしは潔白を主張する。死に至るまで、私は潔白を固執して譲らない。」(27:5)

そして、神から裁きを受けるような罪を犯したことは、「決してない」という言葉を14回も繰り返して語り、「どうか、わたしの言うことを聞いてください」と神に訴えていたヨブです(31:35)。このようなヨブを、神はどのように救いにお導きになったか――。

神は、若いエリフをお選びになりました。そして彼に聖霊を注いで、ヨブの許にお遣わしになりました。そして率直に、「ここにあなたの過ちがある」と語らせました。そしてヨブにも、聞く心をお与えになり、悔い改めへと導かれたのでした。

神は預言者イザヤを通して、神の霊の働きを、こう語っておられます。

「わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザヤ57:15)

だからこそヨブは、自分の頑なな心を打ち砕かれて、エリフの演説を聞き終えると、彼に直接話しかけてくださる神の御声を聞くことが出来たのではないのでしょうか。何と深い愛に満ちた父なる神のなさりようでしょうか。私たち人間には、及びもつかないなさりようです。

この愛の神は、それから1500年後に、御子イエス・キリストをこの世にお送り下さり、この世の最もひどい犯罪者が受ける十字架刑について、どんな罪人の罪をも贖う十字架の救いをもたらしてくださいました。使徒パウロが申しています。「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ローマ5:8)

私たち人間には及びもつかない愛の神ですね。神は、私たち人間が及びもつかないご配慮をもって、私たちの頑なな心を打ち砕き、御自分の語りかけに答えて、神の救いにあずかる者に変えてくださるので、心から、感謝と賛美をお捧げいたしましょう。

祈ります:あなたの貴い御名を心から、ほめたたえます。このように愛する兄弟姉妹と共に、礼拝が守れたことを、心から感謝いたします。ヨブはあなたの御前に、清く正しく生き抜こうと全身全霊を注ぎました。でもこの世に満ちている悪や、天変地異によって、多くの悲しみ、苦しみを経験しなければなりません。しかし貴方は、若いエリフを用いて、ヨブの心を謙遜にして、平安と喜びをお与えになり、苦勞を勞って下さいました。私たちも、この世にあって、悲しみや苦しみを味わいます。でもヨブを最後には、あのように祝福して下さい。あなたの大きな愛を信じて、打ち砕かれた心の持ち主にしてください。あなたの霊、聖霊をお与え下さい。そしてエリフの役割りをわたしたちにも、させてください。主よ、殺し合う戦争を止めさせてください。平和をお与えください。イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン

